



瓦礫の中で何かを探す女性と子ども（米陸軍アーカイブより）

朝鮮戦争に「参戦」した日本人

——ある船員の語りと記録を通して考える

五郎丸 聖子

はじめに

2018年4月に朝鮮半島情勢が大きく動きだしたことで、日本でも朝鮮戦争の歴史の経緯を振り返る報道が増え、朝鮮戦争への日本人の関与についてもフォーカスされるようになった。民間船員の動員の実態や、最近では、軍属として前線に赴き「戦死」した日本人についても報じられた。

わたしが、朝鮮戦争に関わった日本人の存在を知ったのは、三宮克己さん「1」の朝鮮戦争体験記を聞いた2013年のことだ。三宮さんはLST乗組員として朝鮮戦争に関わった。LSTとは「Landing Ship Tank（戦車揚陸艦）「2」」の略で、戦車と兵員を積んだまま海岸に乗り揚げ、それらを揚陸させ、敵前に橋頭堡を築くために使用される船のことである。これに乗り組むということは、敵前上陸を敢行した場合、敵に攻撃されて艦と運命をともにする可能性を孕んでいた。

1950年6月25日に勃発した朝鮮戦争は、1953年7月27日にアメリカが主導

した国連軍司令部の代表と朝鮮民主主義人民共和国の軍、中華人民共和国の志願軍によって休戦協定の調印がなされた。大韓民国は調印しなかった。この日からあまりにも長い停戦状態が続いている。

では、朝鮮戦争は日本にとってどのようなものだったのだろうか。冷戦状況の深刻化の象徴とみられた朝鮮戦争は、実質的に日本の占領統治を担っていたアメリカに、日本の再軍備と単独講和を推進させ、在日米軍を固定化させた。「平和憲法」との矛盾を抱えた戦後体制はこのときから始まったのであり、朝鮮戦争はその後の戦後日本のあり方を規定したターニングポイントであったといえるだろう。

その一方で、朝鮮戦争の発端の根幹にあった日本による植民地支配については、連合国から不問に付されたこともあり、当時の日本社会がそこに向き合うことはなかった。そのため、現在に至るまで、朝鮮戦争に対して、その意味での当事者意識を持つ人はほとんどいない。このような状況をふまえると、朝鮮戦争への日本の関与の

実態を知ることが、現在の日本社会にとって大きな意味を持つといえるだろう。

2013年に三宮さんの朝鮮戦争体験記を聞くまで、わたしは、「1950年に朝鮮動乱が起きた」だとか、「朝鮮特需で日本経済は持ち直した」などとほんの数行、記述することで朝鮮戦争をわかつたつもりでいた。だから、三宮さんの話を聞いたとき、これまでの自分の想像力のなさに愕然とした。同時に、そのように想像せずにいられたことにこそ何か戦後の日本社会を見つめ直すポイントがあるような気もした。

戦後日本は、憲法9条を持つ「平和国家」であった。にもかかわらず、実質的に戦争に参加していた日本人がいた。それは何を意味していて、そのことを今どのように捉えるべきなのか。これらを考えるとき、朝鮮戦争に「参戦」した人たちの体験と思いは示唆を与えてくれる。以下では、朝鮮戦争の体験者の一人である三宮克己さんの語りと記録を通して、日本にとつての朝鮮戦争について考えてみたい。

LST乗組員・三宮克己さんの体験

1945年8月、三宮さんは朝鮮半島の鎮海海軍基地で敗戦を迎えた³。10月初め、引揚船で博多に上陸し、佐世保で復員兵の帰還輸送に応募し、南方からの引き

揚げ輸送に従事した。その後しばらくして、LSTに乗船することになった。

1950年6月のある日、 Guam島から自動車のスクラップを積んで帰航中の小笠原付近で、「朝鮮で戦争が始まった。至急荷物を横須賀にあげて横浜ドックに入れ」という無線が入った。大急ぎでドックに入り、船を兵員輸送用に改造し終えると⁴、米兵たちがジープでどんどん乗り込んできて、直ちに出発だといわれた。どこに行くのかわからない。「とにかく走れ」といわれ、横浜沖まで行くと、「朝鮮に向かえ」という連絡が来た⁵。米兵約200人と車を積んだ船内は緊迫と不安な状況が充満していた。

戦後日本の海運管理体制

朝鮮戦争における兵員や軍事物資の海上輸送には日本海運が大きく関わった。敗戦後、日本の海運管理体制は、運輸省海運総局と船舶運営会に移管された。船舶運営会とは国家総動員法に基づく特殊法人で、海運企業の経営者を中心に構成されていた。戦時体制のためにつくられた船舶運営会は、本来なら敗戦とともに解散されるべきだったが、戦後も諸物資の配給・輸送統制が続けられたことと、在外邦人引き揚げ問題もあつて存続したのである⁶。

1945年9月2日の降伏文書調印後、100総トン以上の船舶の運航は、連合国最高司令官（以下、SCAP）と連合国最高司令官総司令部（以下、GHQ）の管理下に置かれた。10月、SCAPはSCAJAP（Naval Shipping Control Authority for Japanese Merchant Marine）日本商船管理局を設置し、日本商船の配置・運航・修理・造船など海運業全般をここで管理した⁷。また、GHQはSCAJAPの統制業務を容易にするため、日本船主、代理店業者、港湾荷役業者などで構成されるCMMC（Civil Merchant Marine Committee）日本商船管理委員会⁸の設置を日本に命じた。日本政府は既存の船舶運営会にその機能を持たせることを提案し、承認された⁸。SCAJAPの下部機構として海運の国家管理を継続したことは、戦時管理体制の解体を求めた占領政策に逆行する措置だったが、複雑な状況に対処するための現実的な方法でもあつたのである⁹。

朝鮮戦争への協力で復興する日本

朝鮮民主主義人民共和国の軍が北緯38度戦を超えて始まった朝鮮戦争は激しさを増し、同軍は急速に南下。50年6月28日にはソウルを占領した。大韓民国の軍とその支援をする国連軍は半島の南端に追い詰めら

れた。避難民で釜山の街があふれ返り、岸壁付近には戦車、トラック、積み上げられた貨物がびっしりと置かれ、荷揚げ人夫、移動する兵士たちでごった返す様子を三宮さんは目撃している。

〔日本の軍需産業はどんどん復活していく。ですから、韓国の現場で働いている人たちは自分たちが応援してもらっているというよりは、もう腹立たしくなるわけですよね。自分たちが逃げ惑っているときに、日本からどんどんそういうの（トラック、携帯食料などの物資・筆者）を送ってくるというので。……インテリなんかこう言ってますよ。「日本は戦争さままですわね。このおかげで日本はたちまち復興ですわね」って。〕¹⁰〕

一方で、日本に戻ると、
 〔佐世保の方では、あれだけ焼け野原になっただけでも、こういうことを言うんですね。「やっぱり戦争があった方がいいな。こんな景気がいいじゃないか」って。もう佐世保の街なんか沸き返るような景気なんですよ。焼け野原にバラックがばんばん建って、呑み屋ができて、ダンスホールができて、米兵たちがそこで朝鮮に行く前にあり金全部使っていくというもんですからね、ものすごい景気なんですよ。〕¹¹〕

小倉、門司、佐世保などにはバラックやスーベニアショップが出現していた¹²。日本は兵站基地の役割を担うことで復活し始めていたのだ。日本と朝鮮半島を往来する三宮さんは、両者の朝鮮戦争に対する認識のとてつもない温度差を感じた。

仁川上陸作戦——おれは人を殺している

9月に入ると、国連軍は、巻き返しをはかるため仁川上陸作戦を実施する。この作戦には、日本人が乗ったLSTも37隻、参加している。LSTは、アメリカの第1海兵師団と第7師団を乗せ、神戸・横浜・釜山から仁川に向かった。神戸からは66隻の貨物船も出帆した。

「貨物を運べばいいと思っていた」船員たちは、「仁川上陸という本格的な戦闘参加に際しては船内で大議論になった」という。

さらに三宮さんは続けた。

〔私どもの先輩たちはかろうじて生き残った（アジア・太平洋戦争で筆者）人たちで、2回、3回と撃沈されて泳いで助かったような人たちですから、この戦争にもものすごく反対したんですよ。（中略）「また戦争なのか。おれは船乗りやめるんだ」¹³〕
 と言った人もいた。だが、結局、占領軍

の命令には逆らえないという結論に至る。三宮さんが乗船したLSTが運んだ部隊は日本から来た米軍部隊と合流し、さらに国連軍の連合艦隊は各国の軍艦と輸送船などが200隻ほどの大船団を組み、これらが仁川に集結した。15日早朝、先遣隊が月尾島を制圧し、次の潮を待って、夕方にはLSTから海兵隊が上陸を開始した¹⁴。

〔突撃命令が出て全速力で岸へ向かって走っているとき、「着いたらどうなるのか、撃ち返してきたらどうなるのか」。米兵たちも船乗りたちもみな押し黙ってじーっと前方を見つめていました。岸では海兵隊が橋頭堡をつくって待っていて、そこからの信号に従ってドーンと船をつけました。〕¹⁵〕

夜が明けて上陸した三宮さんは、兵士の遺体を目の当たりにする。

〔トーチカに共和国側の兵士が火炎放射を浴びて真っ黒になって死んでいました。全身真っ黒だけど、唇だけが赤かった。足元には「山岳戦提要」と書かれた冊子が落ちていました。黒い死体と白い冊子にギョツとして、「ああ……、おれは何をしているのか、人殺しの手伝いか」。〔中略〕はじめて「人殺しをしてるんだ」と思いま



おわりに

した。恐怖心と腹が立つのとで、捨て鉢な気持ちがいっそう高ぶってきました。みなそうだったと思います。だから、二カ月にいっぺんくらいの補給で日本に帰ると、みな酒をガバガバ飲んでね。つらい酒でした〔16〕。

こうした活動の中で犠牲は生じなかったのか。特別調達庁の調査によれば、特殊港湾荷役者の業務上死亡1名、業務上疾病79名、その他21名(死亡者3名含む)、計101名。特殊船員の業務上死亡22名、業務上疾病20名、私傷死4名、私傷病208名、計254名。その他朝鮮海域等での特殊輸送業務従事中の死亡者26名(港湾荷役4名、船員22名)〔17〕。以上は朝鮮戦争勃発から半年後の調査結果であり、半年で56名が亡くなったことになる。

こうした事実にあふれた後に、三宮さんは次のように述べている。

「よく、「日本は戦後ひとりも殺していない、殺されていない」

というけれど、実は平和憲法の下で死者を出しているということを知っておかないといけない」〔18〕。

ここまで、三宮克己さんの体験を通じて朝鮮戦争への日本人の「参戦」の一端を見てきた。こうした事実は、上述の三宮さんの言葉にあるように、日本社会で共有されてきた「戦後日本」のあり方を根底から覆すものであった。それは、国家が個人の意思を尊重することなく戦争に関与させ、そのことを隠蔽してきたからなされたことだったわけだが、そのような事実は広く知られることがないままに現在まで来ている。

だが、「そのような事実があった」ことを知ったとき、「そのような事実」が隠蔽され、個人の意思が尊重されない状況に対して、今度は、自分自身がどのような態度をとるのが問われることになる。三宮さんの言葉はそのような重たい問いかけだったと思う。

(ごろうまる・きよこ／日本近現代史研究者)

注

〔1〕1927年朝鮮生まれ。1950年朝鮮戦争が勃発するとLSTの乗組員として戦争に動員される。2004年から始まったイラク派兵違

憲訴訟では原告として朝鮮戦争での体験を証拠として提出した。2017年11月11日に逝去された。

〔2〕主として2700総トン、船倉に戦車約40台積載可能。船倉上部に兵員165名を収納できる居住区あり。椀澤陽一(2007)「朝鮮戦争と日本人船員 其の二」『海員』2007年8月号、P.82(以下、椀澤(2007)①)

〔3〕三宮克己(2016)「海風気風 語り継ぐ海上労働運動史12」『羅針盤』第19号、P.12

〔4〕引揚輸送用に改造していたLSTを元の形に戻したということだろう。

〔5〕三宮克己(2015)「朝鮮戦争従軍記」日本は朝鮮戦争で何をしたのか」講演録、むさしの科学と戦争研究会(以下、「科学と戦争」)。

〔6〕椀澤(2007)①、P.84(同〔2〕)

〔7〕椀澤(2007)①、P.84(同〔2〕)

〔8〕椀澤(2007)①、P.84(同〔2〕)

〔9〕三和良一(1992)『占領期の日本海運』日本経済評論社、PP.88-89

〔10〕「科学と戦争」(同〔5〕)

〔11〕「科学と戦争」(同〔5〕)

〔12〕三宮克己(2015)「わたしは朝鮮戦争に従軍した②」『思想運動』2015年5月15日(6)(以下、三宮(2015)②)

〔13〕「科学と戦争」(同〔5〕)

〔14〕椀澤陽一(2007)「朝鮮戦争と日本人船員 其の三」『海員』2007年10月号、PP.85-86

〔15〕三宮(2015)②(同〔12〕)

〔16〕「科学と戦争」(同〔5〕)

〔17〕占領軍調達史編さん委員会(調達庁内)編(1956)『占領軍調達史—占領軍調達の基調』調達庁、P.576

〔18〕三宮克己(2015)「わたしは朝鮮戦争に従軍した 最終回」『思想運動』2015年6月15日(5)